# 田中康夫 浅田彰

今月の憂いゴト

## 中上健次の熊野大学から、湾岸戦争の反戦声明、差別用語の問題、米大統領選の裏側まで。

中上健次の故郷・和歌山県新宮市の「熊野大学」で開催された夏期特別セミナーに講師として参加した田中・浅田両氏。公開講座として行われた「憂国呆談LIVE」では、「オタク」という呼び名を世界に広めた中森明夫氏をゲストに迎えて、中上氏との思い出や中上文学の神髄を熱く、楽しく語り合った。

photographs by Hiroshi Takaoka text by Kentaro Matsui

# 憂国呆談

season 2 VOLUME 75

## 湾岸戦争は「見えない戦争」、「私は」を主語に反戦声明。

**浅田**　「熊野大学」は、和歌山県新宮市の被差別部落出身であることを公表してた中上健次が、その故郷で始めた「部落青年文化会」の発展形。中上が92年に46歳の若さで亡くなってからも続いていて、特に今年は生誕70周年を記念する多彩なプログラムが組まれてる。

**田中**　柄谷行人さんをはじめとする講師のなかで、いちばん彼の小説を読んでいない私が登壇するのも恐縮だけど、どうぞよろしく。

**浅田**　田中さんと中上さんといえば「湾岸戦争に反対する文学者の反戦声明」の時のコラボレーションを思い出すけれど……。

**田中**　80年に『なんとなく、クリスタル』で文藝賞をもらったとき、いわゆる「文壇」の面々からは大衆消費社会を肯定的に描くなんて文学じゃないとお叱りの言葉をいただいたけど（苦笑）、なぜか中上さんは僕を買ってくれて、82年に『ブリリアントな午後』を出したときも評価してくれた。それで、名編集長だった金田太郎が雑誌『文藝』で僕と中上さんの対談を組もうと企画してくれたのに、新編集長たちが「中上さんのような素晴らしい文豪と田中康夫ごときが対談なんてとんでもない」と猛反対して流れちゃった（苦笑）。

90年にイラクがクウェートに侵攻、91年にアメリカを中心とする多国籍軍がイラクを追い返そうと湾岸戦争が始まったときに、島田雅彦が文学者の反戦声明を出そうと言い出し、中上さんも賛成した。ただ、81年に大江健三郎らが反核宣言を出したとき、そんな上から目線の宣言では何の意味もないと吉本隆明が批判した、それと同じ轍を踏んだら意味がないし、島田が「ニューヨーク・タイムズに全面広告を出そう」って息巻いていたのにも「ちょっと違うな」と僕は感じて、声明文の原案が「我々は日本国家が戦争に加担することに反対します」となってたのを、主語を「私は」に変えようと提案したんだ。原爆死没者慰霊碑の「安らかに眠って下さい　過ちは繰返しませぬから」もそうだけど、これまでの数多くの声明も「我々は」という、果たして主語が誰なのか、責任の所在がどこにあるのか曖昧だったからね。物書きだからさまざまな意見の相違はあっても、戦争に加担すべきでないという一点において、「ユナイテッド・インディヴィジュアルズ」として発言すべきだ、と。

**浅田**　89年に東欧の民主化が始まり、91年にソ連でクーデターが起こってソ連崩壊に至る時期、反核宣言の頃にはまだあった冷戦構造が崩壊し、グローバル資本主義の「帝国」（ネグリ＆ハート）が表面化した時期に、左右の党派じゃなくばらばらの個人の連帯っていう新しい政治の形を模索してたわけだね。

**田中**　「連帯を求めて・孤立を恐れず」と拳を振り上げた学園紛争世代は内ゲバになってしまった。ならば、「自立を求めて連携を拒まず」を目指そうよと。

筑紫哲也の『ニュース23』に出たとき、中上さんが「湾岸戦争は見えない戦争」だと言った。僕を含めてほかの作家たちは意味がわからずにいたけど、後から考えると予言的だったな、と。イラクがクウェートに侵攻した際にペルシャ湾に大量の重油が流出して真っ黒になった水鳥の写真がアメリカの広告代理店によって世界中に配信された。実はあの写真はつくられた映像だったのに、「水鳥がかわいそう」「イラクはけしからん」という世論が一気に高まった。そんな時代、中上さんは「見えない戦争」という言葉で、インヴィジブルなものを見通すことの大事さを訴えていた。

**浅田**　中上さんは80年代にTVの取材でインドからロンドンまで走るバスに乗り、後に対テロ戦争の戦場となるパキスタンやアフガニスタンの市場で子どもがメッセンジャーとして駆け回ってるような姿をつぶさに目撃してる。未来を予見してたわけじゃないにせよ、目の付けどころは鋭いね。

湾岸戦争後に世界でテロが頻発するようになるけど、２００１年のアメリカ同時多発テロのときはアル・カイーダという組織があったのに、今は世界各地で不満を抱いてキレかかってる連中がＩＳ（イスラム国）のプロパガンダに煽られて勝手に自爆テロを遂行し、ＩＳは後から「我々の勝利だ」と名乗り出るって場合が多い。7月に相模原市の障害者施設で入所者19人を殺害した男が「ヒトラーの思想が突然降りてきた」みたいなことを言ってるけど、ＩＳの名の下にテロを起こしてる連中はあの男に近いんじゃないか。

**田中**　施設の元・職員だった犯人は「重度の知的障害者に未来があるとは思わなかったから抹殺した」と妄言を吐いているけど、彼の行為が結果的に「お前のような男こそ社会から抹殺されるべき」と他者から言い返されるロールシャッハとなっていることにまったく無自覚だった点がね。

## 中上氏の「路地」はどこへ？あらゆる差別は解消するのか。

**田中**　浅田さんは僕よりもずっと深く中上さんとつき合ってたんでしょ？

**浅田**　いや、運転がメチャクチャ粗い柄谷さんの車に平気な顔で座ってたら、大型免許をもってた中上さんが「お前は死の恐怖を超えている」と驚嘆、一目置かれただけ（笑）。ただ、寂しがり屋の中上さんは文壇バーに行こうとするし、そういう所では威張り出す。生前、「熊野大学」に誘われたときも、故郷で威張ってるんだろうなと思って行かなかったわけ。それが、彼の死の翌年に初めて来てみたら、彼が「熊野には平地なんて中途半端なものはなくて山がそのまま海に落ち込んでる」と言ってた、まさにそういう鮮烈な風土に接し、濃密な人間関係の歴史があることを知って、遅まきな

がら感動したわけ。そんな熊野で、地元の人や全国から集まった人が勝手に中上さんの遺志を継承してるのは素晴らしいことだと思うな。

**田中**　同じ漢字の「市場」も「いちば」と「しじょう」では正反対。独り暮らしのおばあさんに魚屋の主人が「魚の切り身、独り暮らしだから小振りなのを50円負けとくよ」ってのが市場。損益分岐点を計算して常に効率を求めるのが市場。中上さんが被差別部落の符牒として用いた「路地」はまさに市場。でも皮肉なもので、中上さんの実家である中上建設も、市場だった「路地」が同和対策事業特別措置法で区画整理されて市場となる一方、人の体温や顔が見えにくくなっていく時代に建設会社として潤った。それは大規模小売店舗法で郊外型の大型ショッピングセンターが誕生し、街の商店街が衰退していくのと軌を一にしているんだね。

**浅田**　中上さんにとって、負のエネルギーに満ちた「路地」こそが創造の原点だった。ところが、彼がすごいのは、その「路地」が地上げされ再開発される現実を直視したこと。『日輪の翼』では、それで行き場をなくした老婆らを、若者らが適当にかっぱらってきた巨大冷凍トレーラーに乗せ、日本中の聖地を巡礼して回る。このトレーラーこそが「路地」であり、行く先々がみな「路地」なのだ、と。今回、やなぎみわが、台湾の舞台車を改造したトレーラーでこの作品を上演した。新宮港近くの更地で、熊野の山と海を望みながら、日が落ちると近くの郊外型量販店のネオンが見える。そこでトレーラーやクレーンを駆使して展開されるサーカス的・カーニヴァル的なパフォーマンスは実にスリリング。

ついでに言うと、郊外型量販店の一角にあるシネコンでプレミア上映を見た山戸結希監督の『溺れるナイフ』も、思いのほかよかった。中上の愛読者だったらしいジョージ朝倉の少女マンガの映画化だけど、中上文学を読み込んで文芸映画にしようとする従来の試みよりずっといい。故郷の「路地」を捨てることはマンガ的な世界にあえて出ていくことだとわかってた中上なら、自分の遺伝子が少女マンガを経てアイドル映画として開花したのを面白がったんじゃないか。

**田中**　造成後も普段は何も使用されていないだだっ広い敷地で行われた、やなぎ演出の『日輪の翼』は原作の魅力をさらに膨らませた我々に希望を与える大傑作だった。この号が発売される直前に大阪は住之江区の造船所跡地で行われる公演にも、妻と一緒に伺うことにしたよ。それにしても効率優先の市場的考え方が世の中を席巻したからこそ、まるで「排除されたO157」が反乱するかのようにISや相模原の事件が起こってしまうのかもしれない。

**浅田**　関連して言うと、差別用語問題も微妙でね。奈良国立博物館で中世に癩病患者救済に尽くした忍性って僧侶の展覧会が開かれてるけど、主な解説では「ハンセン病」と書いてて、違和感がある。いま映画のリメイクが進行中の『ベン・ハー』でも、癩病に侵された主人公の母と妹がイエスに救われるんだけど、日本語字幕では「死病」になってて、「癩病」の象徴性が全然伝わらない。

**田中**　まったくね。僕が選曲とDJを務めているFMヨコハマの「たまらなく、AOR」でザ・コーギスというイギリスのバンドの1980年の楽曲をかけたんだけど、アルバムタイトルの「Dumb Waiters」は、レストランで地下の厨房から料理をフロアに上げる小さな昇降機のこと。物の言えない給仕人というわけだけど、発話障碍者を意味するダムは差別用語なので最近はSmall Freight Elevatorと言い換えられているんだね。

**浅田**　95年にAIDSで亡くなった古橋悌二は自分たちのグループを「ダム・タイプ」（馬鹿で口下手な奴）と名づけてた。彼が遺したヴィデオ・インスタレーション「LOVERS」の修復が完成して、京都とニューヨークで改めて披露されたけど、傑作だと思うよ。

ともかく、「差別はもちろん差別用語もなくそう」っていう優等生的なポリティカル・コレクトネスが行き過ぎた結果、それを無視して暴言を連発するドナルド・トランプが逆に喝采を浴びることにもなる。

**田中**　4人の主人公を女性にした3作目の『ゴーストバスターズ』がアメリカのネットウヨから大批判を浴びていると町山智浩がラジオで話していた。企画に携わったソニーピクチャーズの女性の元・社長のメールがハックされて出回り、ファンから「なんで女なんだ。しかも、美女ならともかく、おばちゃんばかりじゃないか！」と。トランプの言葉を借りると「ブスとデブと愚図な女は大嫌いだ」と大炎上。フェミニズムやアファーマティヴ・アクションを進めすぎたアメリカは、今こそ逆に「メニニズム」という名の男性の復権を認めるべきだとネットウヨ的な連中が反旗を翻している。日本では小池百合子だ、蓮舫だと女性の時代を謳っているけど、アメリカはその先を暴走しているらしい。

**浅田**　トランプに関して言えば、彼が大統領になっても驚いちゃいけないと思う半面、「ロシアよ、ヒラリー・クリントンのメールを（ハッキングで）見つけろ」という呼びかけにせよ、銃所持者にヒラリー暗殺を示唆するかのような発言にせよ、最近ますます度を超えた暴言が目立ち、むしろ共和党支持者の離反を招く結果になって、もしかしたら限界かな、という気もする。

イスラエルのジャーナリストが、トランプ発言を聞いて、パレスチナと講和したイツハク・ラビン首相の暗殺を示唆する右派

中上さんがすごいのは、
その「路地」が地上げされ
再開発される現実を
直視したこと。（浅田）


**田中康夫**

たなか・やすお●1956年東京都生まれ。一橋大学法学部卒業。
大学在学中に『なんとなく、クリスタル』で文藝賞受賞。長野県知事、参議院議員、
衆議院議員を歴任。最新刊は『33年後のなんとなく、クリスタル』。www.nippon-dream.com

野党、とくにそのリーダーだったベンヤミン・ネタニヤフ（現・首相）のアジテーションを思い出したって言ってた。むろん、はっきり「殺せ」とは言わないけど、ISに煽動された最近のテロリスト同様、イスラエルの過激派がそれにつられて暴挙に出たわけ。

しかし、暗殺っていえば、ここまでアメリカのエスタブリッシュメントの利害に真っ向から対立するようなことを言ってきたトランプこそ、J・F・ケネディの時代だったらとうに暗殺されてるんじゃないか（苦笑）。言い換えれば、大資本と金持ちのための政策を推進しつつ、人種差別や排外主義を煽って貧しい白人の票を集めてきた共和党が、トランプっていう怪物を生み出した、その怪物の始末を自分たちでつけられなくなってるんだな。

## 中森明夫氏も登壇、中上健次が開いた世界へ。

**田中**　このあたりで、隣の三重県出身にもかかわらず和歌山県に足を踏み入れたのは初めて、でも、中上さんとは親交があった中森明夫さんにも入ってもらおう。

**浅田**　今や世界共通語になった「オタク」の命名者でもある。

**中森**　僕が中上さんと最初に会ったのは85年、『平凡パンチ』から対談の依頼があったとき。でも、ほかの編集者から対談は絶対にやめたほうがいい、殴られるから、と。夫婦喧嘩をしたら冷蔵庫を投げるらしい、と。そんな暴力的な人だという噂が立っていたけど、僕も中上さんの作品は読んでいたし、尊敬もしていたから、対談することにしました。対談の席で中上さんはすでに飲んでおられて、僕はビビリながら伊勢志摩の出身だと言ったら、だったら小説を書け、と。三重県からは本居宣長も松尾芭蕉も出ているから書けるって（笑）。お前もたぶん部落出身だろう、だったら書けるって（苦笑）。気に入られたのか、対談の後、ゴールデン街をハシゴして、もう一軒行こうとタクシーに乗せられたけど、その間ずっと手を握られていて、耳元で「文学界の新人賞を取らしてやろうか」って。もちろん酔っぱらいの戯れ言。でも、新人賞を取ったら中上さんと寝なきゃいけないのかなと思ったことを覚えています。そんな感じで、中上さんとは2、3回飲んだかな。やさしかったし、殴られもしなかった。真顔で「文学やれ」って言う人なんて、あの時代にはいなかったから。でも、酔っ払って留守電にメッセージが入ってたりして、面倒臭いなと思い始めたのも本心。宮沢りえがドラマで主演した『オシャレ泥棒』を一応送ったけど、中上さんが「あの小説、すごいぞ」と言っていたと編集者づてに耳にして驚きました。生きているうちに直接、言ってくれればよかったのに。

**田中**　「反戦声明」の会合を開いた六本木の国際文化会館で担当編集者に「おい、タバコ買ってこい」と命令口調で中上さんが喋るから「中上さん、タバコくらい自分で買ってきましょうよ」と僕が言ったら、「おっ、そうか、そうだな」と。でも、周囲は何てことを言うんだ田中は、と腫れ物に触るような反応で、僕のほうが驚いちゃったよ。戦後生まれ初の芥川賞受賞作家だとか、被差別部落出身だとか、そんな「肩書」だけでまわりの人間が持ち上げていたところは彼の幸せでもあり不幸でもあるね。

**中森**　文芸批評家にも持ち上げられすぎていた気がする。『地の果て 至上の時』なんかも、『枯木灘』がとてもよかったぶん読んだら腰砕けで、でも批評家はいいと言っていたから「そうなんだ」と思ったり。

**浅田**　逆に、『岬』や『枯木灘』のテンションまでいった彼が、『地の果て』で更地のような世界に突き抜けたのはすごいとも思うよ。そこから天馬空を行くが如き『日輪の翼』も出てくるけれど、続編の『讃歌』では「路地」の若者らがホストになって歌舞伎町の停滞に飲み込まれる……。

いずれにせよ、中上がすごいのは、自分の文学の濃密なマトリクスだった「路地」が地上げされて更地になる、その現実を直視し、マンガ的になることを覚悟のうえでその外に出て行こうとしたことでしょう。

**田中**　その意味では、中上さんが生まれ育った「川の向こう側」にはこんなに素晴らしいものがあると手放しで称えた人たちは、従来の「文壇」とは違う新たな権威をつくってそこに自分も乗っかろうとしたとも言える。なのに、中上さんが亡くなったとき、それまで持ち上げていた記者クラブ的なメディアのうち1面で訃報を掲載したのは東京新聞だけで、他紙は社会面に小さく載っける程度でしかなかった。それもまた現在のエンターテインメント業界に象徴される、すべてを消耗させていく高度消費社会の残酷さだけど、中上さんはそんなことさえ無自覚の中で鋭く自覚して、凌駕して疾走し続けた人かもしれない。

**中森**　おっしゃるとおりですね。だけど、やっぱり生きていたら相当、面倒臭かったはず。生前、僕も「熊野大学」に来るよう何度か誘われたけど、行きたいとは思わなかった。だいたい熊野に来ても、夏芙蓉は咲いていないし、ここがオリュウノオバの「路地」だと説明を受けても普通の住宅地だし、どんどん中上神話が崩れていって。だけど、中上作品のフィルターを通して「路地」を見ていると、住宅地にさえオリュウノオバが立ち上がってくるのを感じた。さながらポケモンGOのように（笑）。

**浅田**　中上健次は吹きっさらしの世界に出て行きながら途中でいなくなったけれど、それはいまのわれわれの生きる世界と地続きで、彼の仕事はますますアクチュアリティを増している。そのことを改めて痛感させられた熊野の日々でした。

やなぎみわ演出の
『日輪の翼』は原作の魅力を
さらに膨らませた
大傑作だった。（田中）

浅田 彰
あさだ・あきら●1957年兵庫県生まれ。
京都大学大学院経済学研究科博士課程中退。京都造形芸術大学教授。
83年に出版されたデビュー作『構造と力 ―記号論を超えて』はベストセラーに。



ウェブ憂国呆談も進行中！ www.sotokoto.net